

おじいさんが捨てたら

小川未明

青空文庫

ある日、おじいさんはいつものように、小さな手車を引きながら、その上に、くずかごをのせて、裏道を歩いていました。すると、一軒の家から、呼んだのであります。

いってみると、家の中のうす暗い、喫茶店でありました。こわれた道具や、不用のがらくたを買ってくれというのでした。

「はい、はい。」と行って、おじいさんは、一つ一つ、その品物に目を通しました。

「この植木鉢も、持っていてくださいませんか。」と、おかみさんらしい人がいました。

それは、粗末だけれど、大きな鉢に植えてある南天であります。

す。もう、幾いくにち日も水みずをやらなかつたときみえて、根ねもとの土つちは白く乾かわいていました。紅あかみがかつた、光沢こうたくのある葉はがついていたのであろうけれど、ほとんど落おちてしまい、また、美うつくしい、ぬれたさんご珠じゆのような実みのかたまつた房ふさが、ついていたのだろうけれど、それも落おちてしまつて、まつたく見る影かげはありませんでした。

「ああ、かわいそうに。」と、おじいさんは、思おもわずつぶやきましました。

これを聞きくと、若わかいおかみさんは、「おじいさん、どうせその木きは、だめなんですから、どこかへ捨すてて、鉢はちだけ持もつていってくださいな。」と、笑わらいながらいました。

このとき、おじいさんはまだ木きに命いのちがあるかどうかと、まゆをひそめて枝えだなどを折おってしらべていましたが、

「この木きが助たすかるものなら、枯からすのはかわいそうです。」と答こたえました。

おかみさんは、ただ笑わらって、だまつていましたが、心こころの中で、きつとやさしいおじいさんだと思おもったでありましょう。それとも、そんなことを思おもう人ひとでなかったかもしれません。

やがて、おじいさんは、いろいろなものを買かって、それを手てでくる車まの上うえにのせました。南天なんてんの鉢はちものせました。そして、ガラガラと引ひいて運はこび去さりました。

帰かえる道筋みちすじ、おじいさんは、うつ向きむかげんに歩あるいて、考かんがえて

いました。

「あの店も、はやらないとみえて、店を閉めるのだな。しかし、生き物を、こんなに、ぞんざいにするようでは、なに商売だつて、栄えないのも無理はない。」と、こんなことを考えたのであります。

家に帰るとさつそく、木に水をやりました。また、わずかばかり残っていた、葉についているほこりを洗ってやりました。そして日のよく当たるところへ出してやりました。

仕事をしていて、息子の嫁さんが出てきてこれをながめながら、「おじいさん、その木は枯れてはいませんか。」とたずねました。「枯れたのも同然のものだが、まだすこしばかり命があるらし

い。私の丹誠で助けたいと思っている。」と、おじいさんは答えました。

こうしたやさしいおじいさんでありますから、小さいもの、弱いものに対して、平常からしんせつでありました。

「正坊はどうしたか。」と、帰るとすぐに、孫のことをききました。

「いま、どこか外へ出て遊んでいます。」と、嫁さんは答えました。

「よく、気をつけて、けがをさしてはいけない。この木のようなもので、折れた枝が、芽をふいて、もとのようになるのは容易なことでない。病気をしたり、けがをしたりすると、とりかえ

しがつかぬから。」と、おじいさんは、注意ちゆういしました。

晩方ばんがた、息子むすこが工場こうばからもどつて、店みせさきにある南天なんてんの鉢はちを見みました。

「おじいさん、この南天なんてんは枯かれているじゃありませんか。なぜ、こんなものを置おくのですか。」といいました。

「私わたしが、手てをかけてみようと思おもっているのだ。」と、おじいさんは、答こたえました。

「この木きがよくなるのは、たいへんなことですね。」

「子供こどもを育そだてると同じおなようなもので、草くさでも木きでも丹誠たんせいひとつだ。」

こう、おじいさんは、いったのでした。それから、おじいさん

は、朝あさ起おきて、出でかける前まえに、鉢はちを日ひあたりに出だしてやりました。
 また帰かえれば店みせさききにいれてやり、そしてときどきは雨あめにあわせて
 やるといふふうふうに手てをかけましたから、枯かれかかった南なん天てんもす
 こしずつ精せいがついて、新あたらしい芽めをだしました。新あたらしい芽めは、また
 子こ供どものように、太たい陽ようの光ひかりと新しん鮮せんな大たい気きの中うちで元げん気きよく伸のびて
 ゆきました。そして夏なつのころ白しろい花はなが咲さき、その年としの暮くれには真ま
 つ赤つかな実みが重おもそううに垂たれさがったのであります。
 軒のき端ばにくるすずめまでが、目めを円まるくして、ほめそやしたほどで
 すから、近きん所じよの人ひとたちも、
 「あんな枯かれかかった木きが、こんなによくになるとは、生いきものは、
 丹たん誠せいひとつですね。」といつて、たまげました。

がらくたと並べた店さきならに、南天なんてんの鉢はちを出だしておくと、通りとおがかりの人々ひとびとがながめて、

「いい南天なんてんだな。」といつてゆくものもあれば、なかには、売うつてくれぬかといったものもありますけれど、おじいさんは、
「これは、金銭きんせんでは売うられない代物しろものだ。」といつて、断ことわつたのであります。

ところが、おじいさんのかわいがっている正坊まさぼうが、重おもいかぜをひいて臥ねました。

そのとき、診みてもらったお医者いしやさまが、またしんせつな人ひとであつて、たとえば、夜中よなかでも、熱ねつが高たかくなつて、迎むかえにゆけば、いやな顔かおをせず、すぐにきてくだされたから、家うちじゅうのものが、

みんなありがたく思おもいました。それで、正坊まさぼうの病びょう気きもだんだんとよくなりました。ある日ひ、このお医者いしやさまが、この南天なんてんをみ見て、たいそうみごとだといってほめられたので、おじいさんは、だいじにしていたのだけれど、お礼れいこころざしの志いしやにお医者いしやさまにあげたのであります。そして、そのあとで、

「あの人ひとなら、だいじようぶ枯からすことはない。」といって、おじいさんは、安心あんしんしていました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第6刷発行

※表題は底本では、「おじいさんが捨《す》てたら」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：仙酔ゑびす

2011年12月1日作成

2012年9月28日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

おじいさんが捨てたら

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>